

令和6年度ミニ企画展(1)

東京帝室博物館の越中瀬戸窯発掘調査展

越中瀬戸焼復興期の昭和15年、東京帝室博物館（現 東京国立博物館）は、越中瀬戸窯において、初めて学術的な発掘調査を行いました。

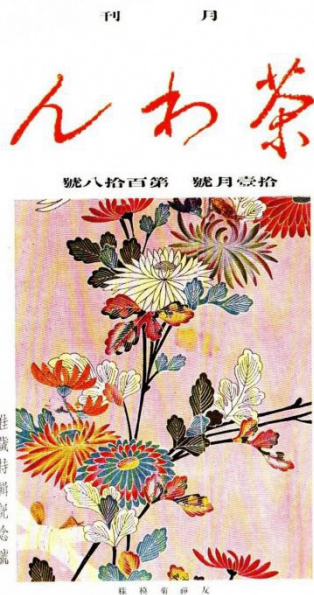
この発掘調査は、富山県の越中瀬戸焼研究者や愛好家が下準備を行い、日本海電気(株)（現 北陸電力）の資金協力によって、ようやく3年越しで実現したものでした。

本展は、その発掘調査に至った経過や歴史的意義を明らかにしようとするものです。

謝辞 本展にあたり次の方々からご教示・ご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

釋永 由紀夫 間野 達 東京国立博物館 富山市郷土博物館
立山町文化財保護審議委員会 越中瀬戸焼歴史研究会 （順不同・敬称略）

「越中瀬戸の古窯地を発掘するまで」掲載



『茶わん』118号表紙



『茶わん』119号表紙

「越中瀬戸古窯地発掘に就て(一)」掲載

1 調査前の下見

東京帝室博物館列品課の鑑査官補 鷹巢豊治は、昭和12年（1937）富山県に立ち寄り、越中瀬戸窯を見学した。

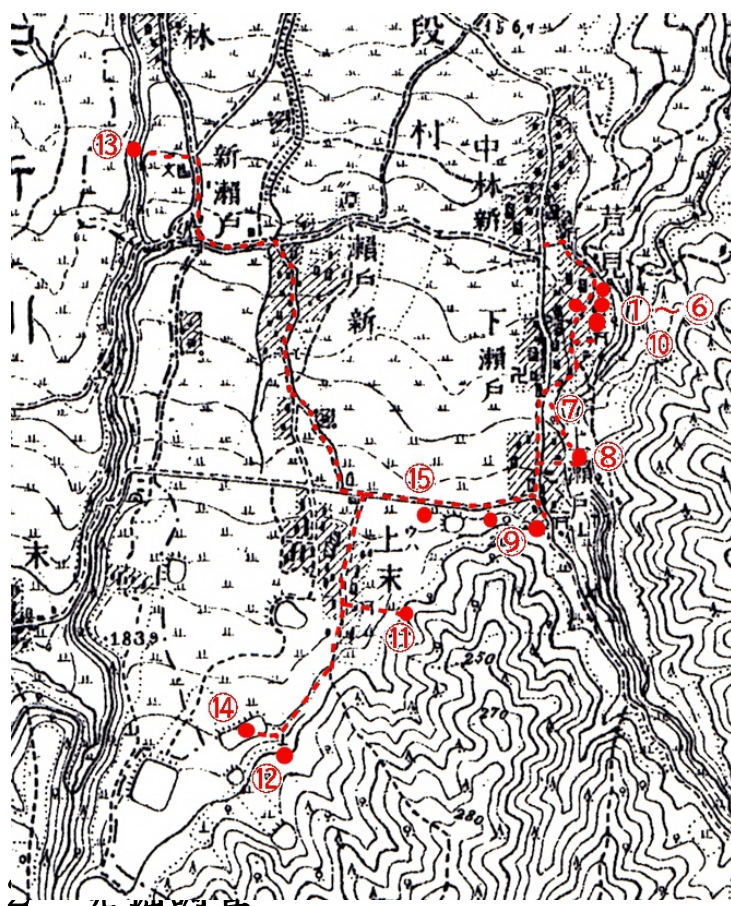
その経過は、鷹巢本人が鴻巣山人のペンネームで「越中瀬戸の古窯地を発掘するまで」と題し、趣味雑誌『茶わん』第118号に詳細を掲載した。

鷹巢によれば、越中瀬戸古窯地で発掘して陶器が出ているから見てほしいと、現地に案内された。上市から現地への途中、柿沢村（現上市町柿沢）で土井法薫の務める明光寺で、発掘品とコレクションを見学した。

鷹巢は、中世に由来する古色蒼然とした越中瀬戸焼の特色に魅せられた。上段村小池兼太郎村長の案内で、窯跡等15か所を巡った。

主な見学地と所見

- 孫市窯** 孫市屋敷とその前面（東側）の窯跡があるが、水田になり、何もない。
- 彦右衛門窯** 上瀬戸にあるが、容易に発見できない。
- 上末山下窯** 窯は深い山林で、山裾の水田より高い位置にある。山裾の小道の土手を発掘して、匣鉢の破片数個が出土した。
- 陶土採掘場** 竪穴式の採掘穴があった。粘土は、「木節と蛙目とを混じた様なかなり粘りのある粘土」で、二人の採掘夫と運搬人が作業中であった。採掘の終わった穴は、貯水池のように水が満水であった。



鷹巢豊治らがたどった下見コース

- 1 孫市窯
- 2 六兵衛窯跡
- 3 甚兵衛窯
- 4 権三郎窯跡
- 5 宮・墓地
- 6 陶片塚
- 7 長八窯跡・七兵衛窯跡・彦右衛門窯跡
- 8 不明胴窯跡
- 9 青原長八窯
- 10 下瀬戸鎮守の森・共同墓地
- 11 上末山下窯
- 12 法光寺谷窯跡
- 13 九左衛門窯跡
- 14 陶土採掘場
- 15 陶祖彦右衛門の墓

鷹巣は、下見の結果、発掘の必要性を述べ、堀井三友に段取りを依頼した。

越中瀬戸焼に拠つて此上は古窯址の調査に俟たなければ之等の古い歴史を解決する方法を得られない事を確信したので、堀井三友氏へ越中瀬戸に対する私の所信を開陳したのである。(中略)越中瀬戸には其れよりもずっと古い時代のよさがある筈であるから之は如何にしても此際何かの方法を講じて、徹底的な古窯址の調査に拠つて伝世の越中瀬戸を研究せねばならない事を薦めたのであつた。

(『茶わん』118号)

2 発掘調査の内容

発掘調査は、下見の3年後、昭和15年4月11日から20日まで10日間実施された。調査地は、上末山下窯、彦右衛門窯、孫市窯の3か所であった。現地調査成果は、『茶わん』に掲載された。

- 『茶わん』119号（昭和15年12月） 上末山下窯の遺構・遺物報告
- 同 121号（昭和16年2月） 彦右衛門窯の遺構、孫市窯の遺構・遺物概要報告
- 同 122号（昭和16年3月） 彦右衛門窯の遺物詳細報告

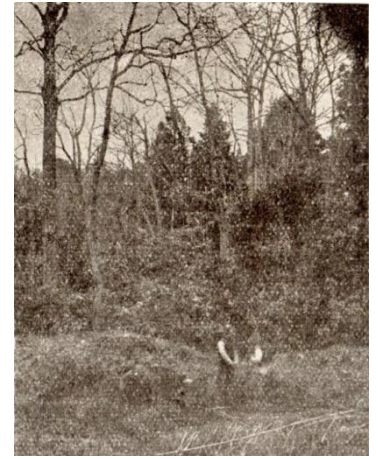
(1) 上末山下窯

山林斜面（第一地点）と、山麓と水田との間（第二地点）を発掘した。第一地点では、窯本体の両側に大きな穴があり、ここで原料粘土を採取したと推定した。第二地点では、窯の地床の一部を発見した。

遺物は、窯道具が多数で、陶器は小皿片 40 点ほどのほか、茶入・盃・鉢・香炉等が少数出土した。小皿の印花文には、単重菊・二重菊・梅花・桜花・橘があり、片面中央に 1 個が主で、花文を数か所に散らしたものもある。また文字には、円内に「大吉」、「大叶」がある。

この窯の特色として、匣鉢の胎土は「粗荒な地膚に白い粒子がまばらに混じて」、優れた信楽を見る感じだと述べた。

この窯が越中瀬戸焼初期製品を焼いたことを確信したという。



上末山下窯の発掘地点
(第二地点)

(2) 彦右衛門窯（上瀬戸）

下見では、彦右衛門窯は山下窯との認識を示していたが、発掘調査時には、上瀬戸字西井上地内の窯を彦右衛門窯と認定し発掘を行った。発掘地点は和田川縁である。

上層は、匣鉢・焼台等の窯道具と焼土が主体で、皿・鉢等の破片が混じる。

中層以下では、茶入・茶碗・皿・向付・盃・猪口・箸立・鉢・香炉等が出土した。

いずれも江戸中期以降と思われるものが多い。

破片であったが、茶入の出土をことのほか強調した。



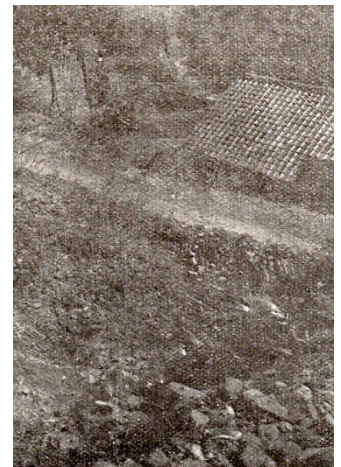
上瀬戸彦右衛門窯の発掘地点

(3) 孫市窯（下瀬戸）

孫市屋敷跡北東側の斜面途中（第一地点）と、川に面した崖の方（第二地点 現芦見橋西詰付近）の 2 か所を発掘した。

第一地点では、江戸前期（慶長期）から江戸末期まで、層をなして遺物が出土し、越中瀬戸窯で最も多種多様と評した。

慶長期の小皿は、「胎土は山下窯印花文小皿に似て居り、それよりも少々粗い感じがする」との比較を明らかにした。



下瀬戸孫市窯の発掘地点

(4) 発掘参加者等

発掘調査の実施にあたり、資金調達や調整は堀井三友が行った。資金は、日本海電気株（社長 山田昌作）が提供し、現場の段取りは新田與一常務が世話をした。

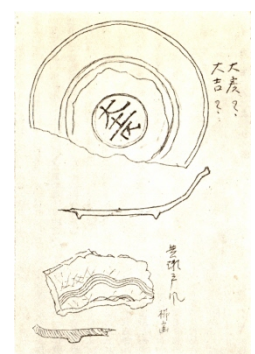
発掘には堀井三友・長島勝正・藤縄慶二・萩中喜代治・土井法薫らが参加した。

(5) 遺物報告

休日を利用して、鷹巣が一人で作成した。これまで実測図を書いたことがなく、今回初めて書いた。「見苦しい図」と自身で評している。



上末山下窯出土印花文皿
『茶わん』119号巻頭写真



鷹巣初の実測図
(上末山下窯)
同 119号掲載

3 鷹巢の報告～中断とその後～

鷹巢が報告を3回目まで作成したころ、帝室博物館では、東京大空襲の情報を知り、重要文化財等の疎開を開始した。鷹巢は陶磁器の疎開担当となり、業務に忙殺された。また「正倉院御物特別展観—紀元2600年記念—」の開催にも関わり、報告は中断した。

鷹巢はその後、越中瀬戸焼をたびたび展示して、関心を続けた。

発掘から14年後の昭和30年、鷹巢は『世界陶磁全集』第6巻（河出書房）に「越中瀬戸焼」を執筆した。

そこには、既報告の上末山下窯・上瀬戸彦右衛門窯に加え、未完だった孫市窯などの遺物が紹介され、実質的にこの『世界陶磁全集』が、昭和15年の発掘調査の最終報告となった。

4 富山での動き

発掘品は、発掘の翌5月に、磯野富之助・翁久允らが主催した「郷土文化展覧会」において、発掘品数十点が富山市商工奨励館で展示された。

その後、報告に要する物は東京の鷹巢の元へ送られたが、残った発掘品は長島勝正が整理し、日本海電気ビル（現 富山電気ビル）に展示された。

昭和29年富山産業大博覧会終了後、全ての展示品は模擬天守閣（現 富山市郷土博物館）へ寄贈された。

鷹巢の整理・報告が終わった発掘品のほとんどは、富山へ返却され、富山市郷土博物館が所蔵している。

5 発掘調査：鷹巢の本当の目的

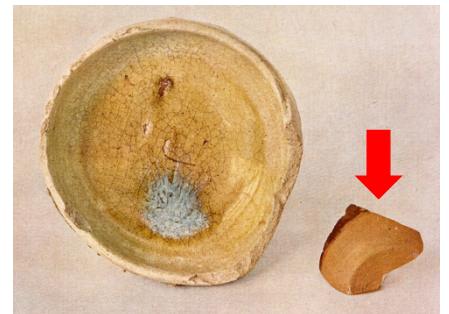
鷹巢は、昭和11年4月～6月に富山市で開催された日満産業大博覧会に展示された前田家所蔵の茶入24個を見学し、それに魅せられた。

下見を通じ、茶入がどの窯から出土し、どの年代なのかを知りたいという欲求が強くなり、発掘調査へとつながっていったとみられる。

報告では、茶入は1点のみだったが、後に3点に増えた。鷹巢は、破片だけでは全貌は分からないとしながらも、前田家所蔵の茶入と酷似するものを入手できたことに、充分満足した。

はからずも彦右衛門窯跡から前田家所蔵に酷似せる茶入破片三個を発見した。この三個の茶入破片はいずれも肩衝茶入らしく想像され、胎土は緻密で、ロクロも精巧である。中二個は銚釉が腰のあたりまでかかり、その中の一個は灰釉の垂葉が一本なだれ、畳つきのあたりで止まっている。而して残りの一個は黒褐色釉が同じく腰の辺までかかっており、底は三個共美しい糸切である。

（『世界陶磁全集』）



『茶わん』121号掲載茶入（矢印）

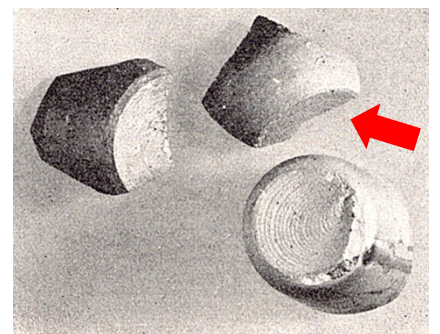


Fig. 164. 越中瀬戸焼 破片
東京国立博物館蔵

『世界陶磁全集』掲載茶入
（矢印は『茶わん』121号と同一品）